

“コロナ禍に同期の仲間は 何を考え、どう過ごしたか”

2020年2月1日、クルーズ船『ダイヤモンド・プリンセス号』の乗客に新型コロナウイルスの陽性者がいることが確認されました。同船は3日に横浜港に入港しましたが、その後乗客は2週間以上の隔離状態におかれしました。テレビのワイドショーは連日その様子を報じていましたが、その時点で、現在まで続くことになる「コロナ禍」を想像できた人は、果たしてどれだけいたでしょうか。

同期の多くが還暦や定年を迎え、新しい人生設計を考えようとしている矢先に生じたこの未曾有の事態。今号では、同期の仲間は何を考え、どう過ごしたかを、寄稿・投稿を掲載することでお伝えします。

2020年度総会報告

2020年度総会報告 感染拡大防止の観点から 書面総会としました

コロナ禍にあって、2020年度の総会は、例年のような会員参加の総会は無理と判断し、書面総会としました。8月8日、新支部長・葛西充さんが経営する株式会社グッドにおいて、前支部長・内山勢さん、幹事長・柳季幸さん、事務局長の中川順一さんの4名で準備し、会計監査・竹田佳代子さんの確認後、総会書面を会員に送付しました。

書面総会では、前年度の活動報告と収支決算、新年度の活動計画と収支予算、新役員等が賛成多数により承認されました。

白門58会(中央大学学会白門58会支部)2021年度役員

会長：葛西 充(学会支部長)

副会長：内山 勢、米山 真澄、内村 愛、吉住 康、中川 順一(事務局長)

幹事長：柳 季幸(会計担当兼務)

幹事：竹田 佳代子(会計監査)、小暮 睦美、伊崎 圭一、岩原 美佳、内田 和浩、黒木 康夫、藤森 康友、宮本 裕之、村田 稔、光主 圭子、本池 克紀、山田 葵、畔川 いつみ、荒井 辰雄、安東 正策、堀井 義明、竹島 恭治、湊崎 俊也、後藤 弘之、小原 伯夫、加藤 英雄、小宮 一洋

新支部長挨拶

葛西 充(法・政)



在学生支援活動も 考えていきたい

本年度、会長(支部長)に就任させていただいた葛西充(中大附高、法学部38組)です。コロナ禍での就任となりましたので、同期の皆様とお会いする機会もつくれず非常に残念に思っています。

私は地元の神田で不動産仲介の店を経営しながらまちづくりNPOや町内会、法人会、区立小学校、幼稚園の運営協議会等々の活動をしています。どれも実際に集まっただけの会合等は中止となり、リモートや書面開催となっています。でもそれらは皆、長い間携わっている活動なのでそれでも何とかありますが、大学の在校生、特に新入生のことを思うと本当にかわいそうで辛いです。今後支部としても何らかの支援ができないか、皆様と考えていきたいと思っています。

寄稿

01 コロナ禍とは何か？ そして私達の進む道

渡辺幸之助

わたなべ・こうのすけ

文・文(国文)。武蔵野大学文学部特任教授。山梨県内で中学校教員を37年間務め校長で定年退職した後、現職。専門は国語科、学級づくり。山梨県内を中心に研修会講師、講演活動を展開中。



さざ波の中での定年退職

「第1波」と呼ぶにはあまりにささやかな波。感染者数を示すグラフの中の、子どもでも踏み潰せそうなこの小さな山が、4月中旬をピークとして「聳えて」いる。その直前にある「さざ波」の中で、37年間の教員生活が終わった。

「全国一斉の休校要請」あの唐突な独断に怒ったのは、定年退職への感傷からではもちろんない。あまりの想像力の欠如に対してだ。専門家会議も存在し、閣僚にはそれぞれの担当がいて、それぞれの分野に助言者・ブレンがいるはず。少なくともリーダーが決断を下すには、相当幅広く意見を聞き、自分自身の腹を決める拠り所の「核」をもたなければならぬ。それらをすっ飛ばしてのまさに独断。日がたつに連れて

詳らかになる顛末からは、それまで感じ続けたこの国のリーダーの「欠落」が何重にもダメ押しとして印象づけられた。

「首相があそこまで言うのを県教委は無視できないでしょう。」分別くさい言葉で、休校開始のタイミングを受け入れようとする校長会での意見。「誰の立場でものを言っているんですか。私達は校長の立場でまず考え、学校を代表して主張する。卒業の季節を迎える子どもや親、教員の思いを背負っているのがこの立場ではありませんか。」せめぎ合いを経て何とか数日休校を遅らせ、その間にできることをすることになった。報道ではさっさと休校措置を取る自治体・学校の多さ。誰に目が向いているか。公教育の危うさを感じた。

時間は戻らない。「今思えば……」は泣き言でしかない。それでも、あの時点で職員室で話した内容を記す。

「100歩譲って、感染の広がりも懸念するにしてもこう言うてほしかった。『学校でも極めて大事な卒業の時期を迎えていることは理解できます。そこで、細心の注意を払ってあと1週間の猶予期間の中で必要なことを済ませ、休校措置を取って下さい。ここで感染爆発を抑えることで、4月からの学校再開に希望が見出せるでしょう。』というような。ただし、今休校したって4月にコロナが収まる保障は全くないけど。いや、絶対無理だって!」

今となっては……。

第1波ピークの前に新たな日々が始まった

第1波の小さな山の途中で、大学と中学校、2つの新しい職場での仕事が始まった。

10年にわたった公立中学校管理職の仕事から大学教員

コロナ禍に 何を考え、 どう過ごしたか

投稿から

吉田 昇

幹事の皆様のご尽力に、深謝申し上げます。2回目の緊急事態宣言が発令され、現役学生諸君の生活への大きな影響が長引き、先が見通せない中、大変心配しております。微力ながら可能な限り寄付を継続して参ります。斯様な状況下、箱根駅伝が開催され、本学チームが、無事完走できたことを嬉しく思います。早く、シード権を奪還してほしいと願っています。人類は、ウィルスとの戦いです。辛抱強く前向きに考えて対応するしかないと思っています。喫緊の課題は、医療従事者へのサポートだと思っています。医療崩壊は、覚悟しなければなりません。最後に、学員の皆様のご多幸とご健康を祈念いたします。有り難うございました。

として授業をする日々へ。山梨から都内に職場が移っただけでなく、山梨の中でも「僻地」と呼ばれる全校生徒15名の中学校。その教員も兼ねる。大学も中学校も通勤時間は片道100分ほど。その上勤務する大学は「休校しない宣言」を早々出していた。悩む猶予すら与えられない。

大学での新しい同僚の誰一人としてオンライン授業の経験はない。まず、学生に課題を出し、メールで指導をしつつオンライン授業開始の準備をする。コロナ第1波の小さな山を下りきった頃、初めてのオンライン授業を開始した。それから間もなく大学2年、3年、4年の授業と、中学3年生の授業を並行させる日々が始まった。

数回の授業経験から、このオンライン授業の可能性に気づいた。国語科教員を目指す学生達の前向きな人間性に拠るところは多い。それ以上に、PCを介しても熱意は間違いなく伝わるのが分かった。それはまず教える側の試行錯誤から伝わる。ZOOMを使った授業でのパワーポイントの効果的な使用にはすぐ慣れる。次は、ZOOM内でのグループセッションの容易さを知る。ペアワークや、3人1組、4人1組でのグループワークは学生に好評。教育実習を控える4年生の模擬授業すら4人1組でなんとか2回実現できた。教員1人、生徒3人。これは期せずして私自身が小さな中学校でしている授業形態と同じであった。さらに言えば、中学校で進行している国語の授業と、大学での「国語科教員養成のため」の授業が内容的にシンクロしていった。この日々はスリリングであり、刺激的であり、示唆に富むものであった。

最も大きな収穫が、大学生とのメールによるフィードバックの交流。授業感想がGメールで送られてくる。その分量は400字程度からスタートし、どんどん増え2000字を超え

るものも見られるようになった。その授業感想から優れたものを抜粋し、次の授業までに全員に送る。その感想集を通して、学生達が相互に学び合うことができるようになった。学生同士、授業感想に相手の個人名を入れながら評価し合うことが広がっていった。これはまさに「学びの共同体」と言える。

この習慣は1年間、その質を深めながら続いてきた。

第2波前の「小さな論争」

既に全国の多くの学校が3ヵ月近い休校を強いられているさなか、全国的に「小さな論争」が沸き起こった。「9月新年度開始論争」である。火を付けたのは高校3年生の訴えだった。高校生活最後の1年がコロナ禍での休校措置によって蝕まれた。これを回復するには9月から新年度を開始する以外にない。

この素朴な訴えが、複数の政治家のやや意図不明な発言によって追い風を受けることになる。瞬間風速とすればかなりの勢力があるかに見えた。場合によって国を動かすかと錯覚するほどの。がしかし、1ヵ月程度であえなく消滅した。

さかのぼること1ヵ月。我が家の食卓で「9月新年度開始」の必要性を私自身が妻（中学校教員）に論じていた。その時点で既に失われた1ヵ月の学校生活を取り戻す手段として。やがて意図不明な政治家の追い風が報じられると、「千載一遇のチャンス」を感じ、何としても生かしたいと自分でも意外なほど興奮した。

5月末、あの独（毒）断から既に3ヵ月の学校生活が失われようとしていた。これは狭小な「学力低下」などという問題ではない。人生の重要な経験が損なわれたと言ってよい。私の前年度勤務校では、広島への修学旅行が計画変更となっ

玉井 聡 (法・法)

一言で言いますと、東京単身の身にとってこの1年は独房生活の様でした。人に会わない。話さない。外食しない（昼夜弁当）。移動しない。会社も時差出勤や在宅勤務を推奨して、週2日しか出社しない始末。本当に会話しませんでしたね。たまに出社して、あまり話したことがない人に向かって「どう、最近太った？」や「コロナが終わったら一杯行こう」なんて話しかけたりしてましたけど。

くだらないTVを観るくらいならと昔買った本やDVDを見てましたが、時間をもて余してたので、掃除や料理なんかもしていました。そして最後は携帯へと手が伸びて1日終了。

いつまでこの状況が続くのかわかりませんが、己の過去や未来を内省する貴重な時間だったと思っています。

私もあと少しで東京卒業。そして子供のころにもどって自然の中へ突入して行きます。

同期の仲間の皆様へ「After night comes the day」明けない夜はないです。お元気で。

佐脇 理恵 (文・国文)

4月の緊急事態宣言以降、できるだけ外出は控え、ジムにも行かずに過ごしていたら、腰痛がひどくなり、寝返りや朝起き上がることがとても辛くなりました。

それまでと違う生活リズムで、運動不足になってしまっていたようです。

現在は、だいぶ痛みもとれましたが、元気に普通に過ごすことは、何も考えていなかった若い頃とは違うのだと痛感しました。

た。学園祭や宿泊行事が縮小を余儀なくされ、多くの大会が中止になり、そして何よりも日々のみずみずしい学校生活が著しい制限を受け続けた。

これを回復し、さらに長年の「悲願」を達成するには「9月新年度開始」は起死回生の策と思えたのだ。この「悲願」とは、東大が試みた「9月入学」と同一ではない。公立小中学校教員にしか分からないささやかな願いだ。日本の公立小中学校の1年は3月25日前後に終わる。そして新年度開始が4月1日。私が採用された時代に、山梨県の学校現場ではこの「4月1日」に執着していた。そのため、転任する教員はほんの1週間弱で「前任校の締めくり」を全て完了させ、「新任校への準備」も済ませなければならない。場合によっては、転居し、住民票を移し、生活の全てを変えて新しく子ども達の前に立つ。その期間が1週間である。

これがもし「9月新年度開始」に変われば、そこに1ヵ月以上の余裕が生じる。教員生活のスタートが間違いなく変わる。

「ダメ元」の思いでその時点ですることから始めた。ネットへの意見投稿、知り合いの関係者への提言—教育委員会、町の議員、大学教授等。

しかし、ある程度の論争に発展しながら、その途上であっけなくこの道は断たれてしまった。意図不明な政治家はともかく、立命館アジア太平洋大学の出口治明学長や開成中学・高校前校長の柳沢幸雄氏などの、幅広い見地からの賛成意見には心強い思いも抱いた。大きな変化を自らつくれない国民性を引きずって、重い扉を突破していくにはこのコロナ禍以外にチャンスはない……。しかしやはり無理だった。

この「小さな論争」が収まる頃、既にコロナ第2波への動きは始まっていた。

コロナ関連の報道などでも「65歳以上の」という区切りを耳にすると、65歳までにあと何年もない自分に愕然としました。

自分の年齢はわかっていたのですが、それはどういうことを考えさせられた一年でした。

健康で普通に生活していくことをこれからは大切に考えていこうと思っています。

ペンネーム華梨

2020年10月末に還暦を祝う会が企画されていて、コロナ騒動の前にその企画を聞いてとても楽しみにしていました。1月に日本でもコロナに罹患した人がいてびっくりしましたが、10月頃には落ち着いているだろうとずっと思っていました。オリンピックを始め次から次へと自粛・

コロナ禍とは何か？そして私達の進む道

それは「世界大戦並みの災禍が、日常の風景の中で進行する未曾有の体験」そうやってきた。

「世界大戦並みの災禍」は今年の3月には感じていて、職場でもこんな言い方をしていた。「コロナって東日本大震災クラスなのかそれとも太平洋戦争クラスなのか、どっちかねえ。」その時点ですら「東日本大震災を越えていこう」と多くの職員が言っていた。

にもかかわらず、職場にも町にも家庭にも、その程度に合った緊迫感がない。それは、「日常の風景」が続いていたからだ。まさに「日常の風景の中で進行する未曾有の災禍」と言わざるを得ない。

では、私達の進む道は？

私の所属するある協議会で、「コロナ禍をどう教訓として残すか」という議論を始めたのが9月。今思えば第2波の終わりが見え、終息の期待も今ほど心許ない感じではなかった。その協議会では自治体からの諮問に対して答申を出す任務を負っている。直接コロナと関係している分野ではないが「コロナは避けて通れない」という意見は会員の中で一致した。この日々を記録しよう、その中から明文化しよう、そういう使命感がその場を活気づかせた。自分たちの活動が後世にきっと役立つ、そういう思いは人を奮い立たせる。

たかが10人程度の小さな協議会である。そんな大げさな使命はそもそも与えられてはいない。しかし、いいのである。使命は与えられるものであるが、使命感は自ら得るもの、感じ取るものである。私は感じている！これを契機とする使命感を！

(本誌で省略した「第2波の中で見た『幻影』」「第3波ピークの兆しの前で～NetとTVのメディア特性」等、寄稿全文はホームページに掲載しました。)

中止・延期になっていく流れで、還暦を祝う会もとうとう中止になりました。期待していたのでとても残念でした。

中央大学を卒業して東京の世田谷区立保育園で5年間働いてから、結婚して石川県にずっと住んでいました。その為、高校を卒業してから逢えていない友人も沢山いたので10月の還暦を祝う会を心待ちにしていました。

私も4月中旬から在宅の仕事を始めました。保育士なので保育で必要な玩具づくりをしたり、雑巾を縫ったり、子供たちの笑顔の為に何ができるかといろいろ考えました。自粛生活で家の中で身体を動かしたり、玩具づくりに必要な手芸材料を買い出しに行ったりしました。パソコンを使うデスクワークの人だけが在宅勤務をできるとずっと思っていました。自分も在宅勤務ができるのはとても自分で自分に驚きました。大学時代の同期生とは連絡を取りあって、それぞれに工夫して在宅ワークにしたり出

寄稿

02 学生と同僚・同業者に助けられた1年

中島康予

なかじま・やすよ

法・法。中央大学法学部教授。中大大学院修士課程修了後、助手、助教授を経て2000年に教授。副学長（2017～18年）、法学部長（13年～17年）などを歴任。専門は現代政治学。著書『暴力・国家・ジェンダー』など。



フランスで地方選挙が実施されるのに合わせ、約3週間の調査計画を立て、出発を目前にしていた1年前。フランスからの帰国者が新型コロナに感染したとの報に接し、フランス行きを見送ることを即決しました。医療制度が異なり、母語でコミュニケーションをとることができない場所で感染することや、移動に制限がかかることなどに不安を覚えたからです。「9.11」にフランスに滞在していたときのことが頭をよぎりました。

新年度の準備に頭を切りかえ、情報収集を開始。東京大学をはじめ、いくつかの大学はオンライン授業を含む対策の検討で先行しており、その内容の一部が、ホームページ上で閲覧できる状態にありました。以後、先行する大学や同業者が提供するオープン・リソースのお世話になり、その状況は今

勤日数を減らしていました。毎年、年に1回は逢っていたのが、それも不可能になり、その分、連絡はお互いにこまめに取りあうようになりました。

コロナで通っていたスポーツジムもしばらくお休みとなり行くあてもせばまってくるなどが…いろいろ思いました。毎日よく歩くように心がけました。目標を1万歩以上にして一番よく歩いた日は25000歩ほど歩くこともありました。

コロナによって行動範囲や仕事は減ったけれど、また自分なりにどんなことができるかを考えてみたり、接触時間を少なくして人と出逢ったり、制約がある中でもいろいろな挑戦できるもんなんだなあとしみじみ思いました。

渡邊 誠

コロナ禍での生活、年金生活者にとってその日常は以

もあまり変わっていません。

大学からWebexのアカウントが提供されることになり、同僚教員から、Webexを一緒につかってみよう、と声をかけてもらい学習開始。別の同僚は、ホームビデオで作成した授業コンテンツをサンプルとしてシェアしてくれました。ただ、私が担当する講義科目では抽象度の高い理論を扱うので、この方法では文字情報が不足することは明らかでした。そこで、パワーポイントのスライドにナレーションをつけてビデオに変換して、Google driveにアップロードし、manaba（クラウド型の教育支援サービス）上でビデオのリンク情報を学生に開示。スライドは配布資料にしてmanabaから学生がダウンロードする手法を選びました。毎週、ビデオを視聴した上で解答するドリルを出題し、正答・解説をフィードバックする学修のサイクルをつくることにしました。この方法は、コンテンツ作成に膨大な作業を要するわりに、低い評価がなされることもあります。が、リアルタイム授業で音声が届かないなど、学生の通信環境による格差を心配することなく、安定的に授業を実施するという点では優れていると思います。アップロードするファイルを間違えたときには、学生から、ファイルが間違っていると非常に礼儀正しい調子のメールが届くなど、学生に助けられました。

秋学期には演習を対面方式で実施するかどうか、教員と学生の選択に委ねられることになりました。学生に意向や心配なことを遠慮なく知らせてほしい、と個別にメールを送ったところ、返ってきたのは、対面への慎重な声でした。学生自身の疾患、実家で生活している、高齢者と同居あるいは同居予定、長時間の通学時間が心配。対面を望む声がゼロで、これを押し切って対面メインに移行することを決断でき

前とさほど変わらないとも言えます。朝夕のラッシュにもあわず、テレワークの体験もせず生きています。でもマスクを着用し、三密を避け、帰宅時にはうがい・手洗いなど感染予防を施しています。友人らとの会合も消え、趣味のカメラを背負いの気ままな旅も消えた。外食も極端に減った、70歳を目前にしてこんな生活がいつまで続くのかと思うと「時間を返してくれ〜」と叫びたくなるが、これも同時代を共に生きている人に平等の扱いだ。それよりも医療関係者の献身的な活動や苦しむ感染された人々を前に何を語らんかだ。

反面、読書の量は多少なりとも増え飲食の激減により支出も多少抑制された（家呑みは増えたが・・）。その増減分を箱根駅伝強化募金に応じることができた。これは個人的にプラス面だろう。総合12位、創部100年に向け、さあ来年が楽しみになった（^^）

ませんでした。このあたり、別の問いかけをすれば、別の答えが返ってきたかもしれません。1年生対象の導入演習では1万字程度の論文を執筆することが最終目標。デジタル化されていない論文などは私が図書館でコピーをとり、PDFファイルにして学生に送ったりしました。1年間の成果を1冊の論文集にまとめ、学生にこれから送ります。キャンパスにほとんど足を踏み入れることができなかった1年生が、中央大学の学生として1年を過ごしてきた、その時間を目に見える形にして手元に残してもらいたいと願っています。



匿名希望

人類が、日本人が、自分が試されているんだなあ!と思っています。

国政が頼りにならない時、地方が頑張る。国民一人ひとりが、今、頑張っているんだけど、限界もある。

国民は、今の政権を選んできたからには、その責任を負う覚悟が出来ているところが「日本人の強さ」かな。

ただし、その「シッペ返し」は、そう遠くないはずなのに……野党が、分裂したままでは…果して…

森川 祐二

局面の変化、収束等、先行不透明な中、目の前の事に力を注ぐ以外ないものと存じている次第です。皆々様の

寄稿

03

コロナ禍、 大学オンライン授業 奮戦記

内山 勢

うちやま・つよし

経・経。毎日新聞社に入社し、「サンデー毎日」、大阪本社社会部、東京経済部記者、大学生が企画・取材・執筆する毎日新聞「キャンパス」編集長を経て、現在、教育事業室委員として、大学を担当。現在、国立大学1校の客員教授、国立と私立各1校の非常勤講師も務める。



会社の仕事の延長で、2020年度は3つの大学で授業を受け持つことになり、昨年1月ごろからパワーポイントでの仕込みを始めた。3つの大学とは、東京駅から1時間ほどの、地方国立大学S大とU大（後期のみ）、それから首都圏の私立大学K大である。4月7日に第1回目の緊急事態宣言が発せられた。私はその前日、手続きでK大学を訪れていた。翌日K大学から「大学の入構を禁止する。すべての授業はオンラインで行う」とメールが来た。

『えー!』という感じだった。緊急事態宣言が発せられても対面授業は行われると安易に考えていたが、急にオンライン授業の準備をしなければならなくなった。

オンライン授業の案内はこういうようなものだった。「Zoomやtemasなどを利用するか、パワーポイントの動画機

ご健勝、ご自愛をお祈り申し上げます。

白井 邦夫

リモートワーク6カ月目に突入しますね(投稿時)。

この猛暑の中、通勤列車に閉じ込められないのは、幸いです。

丸山 健司

コロナ禍の中、執行部の皆さんにおかれましては、大変なご苦労のことと存じます。

何卒、お体をご自愛くださいますようお願い申し上げます。

私は、のんびり、マイペースに仕事に生活に楽しんでおります。

能等で、オンデマンド方式かオンタイム方式でお願いします。その二つを組み合わせたハイブリッド方式でも可能です」。

正直、ズームは一眼レフのズーム機能しか知らなかった。『ズーム?一眼レフを使ってオンライン授業をするのか?』『オンライン機能なんてもってない。大学はスタジオを用意してくれないのか?』『チームス(正式にはチームズと濁るらしい)?何それ?』。4月7日の段階ではそのレベルの知識、というかオンラインに関する知識はまったくないに等しかった。どうやってオンライン授業をやる—この時のプレッシャーは久しぶりの緊迫感だった。4月中旬からのオンライン授業に間に合うのか……。

幸い、パワーポイントは対面授業でも使いこなしていたので、これをオンラインにのせればいいのだな、ぐらいは漠然とわかった。ネットで調べると、オンラインにするには、ズームのソフトをダウンロードして、それにコンテンツ(パワーポイントなど)を「共有」としてアップする。そうすると参加者全員がそのコンテンツを見ることができる、ところまでどうにか理解できた。そこで一つの疑問が生じた。「自分の映像や音声をどうするのか?」。

あわてて、近くの家電量販店に駆けつけたが後の祭り。オンラインに必要なヘッドセット、マイク、ヘッドホンはすべて売り切れていた。家に戻りAmazonをのぞいたが、そこも「入荷まで1カ月」などの羅列。あー、おれは乗り遅れている、と焦った。Amazonを何度も検索してヘッドセットやオンライン用カメラをどうやら入手することができた。マイクもいくつかの量販店を回って仕込んだ。ヘッドセットがあればマイクはいらないが、音がいいのでは?と4500円程度のミニマイクを購入した。後で分かったのだが、会社から支給されている

パナソニックのノートパソコン「レッツノート」には、カメラやマイクも常備されていた。イヤホンさえあれば(なくてもスピーカーで聞ける)、オンラインを始めることができたのだ。パソコンには習熟していると思っていたが、どうやらド素人レベルだったようだ。

刻々と迫るオンライン授業。どういうスタイルで行うか、が次の大きな課題だった。どこの大学も「学生の通信量(料)の負担を考慮して、オンタイム(ライブ)授業はなるべく避けること」とのお達しだった。事前に収録して都合のいい時間に視聴してもらうオンデマンド方式を推奨していた。いろいろ試行錯誤して私が採ったのは、オンデマンド方式+オンタイム方式+リアクションペーパー提出。ズームでひとり語りで収録し、YouTubeに学生だけの「限定公開」(これもこの時に覚えた)でアップしてオンデマンド方式で事前に視聴してもらう。授業時間当日はオンタイム方式で30分程度のライブ授業を行う。授業後、その日のうちに授業の感想をつづったリアクションペーパーを提出してもらう、だった。これだと通信量(料)の負担も軽いいし、授業に参加した気分にもなれると判断した。一応学生たちの意見を聞き賛同を得たのでダブル方式を実施した。

オンデマンドでは課題も出し、オンタイム授業でその課題について議論するというのも行った。通信量の負担は軽いですが、課題対応の負担は重かったかもしれない。「どの授業も課題が増えた」というのはどこの大学のアンケートでも学生たちは感じていた。

私が実施した方式は、「反転方式」というのだそうだ。教育のプロではないので、そんな方式があるのかと感心したが、授業前に課題を出し、授業でその課題について議論を

荒井 辰雄

行政書士は廃業しました。

今は学習塾で講師のアルバイトをしています。

4月に緊急事態宣言が出ると、塾は休校になりました。

休校は1ヶ月続き5月にオンライン授業で再開。

6月になってようやく従来どおりの対面授業が再開し、現在に到っています。

英語の授業で、アドレスは“住所”の意と話したら、中2の生徒がビックリしていました。今の中学生は、2005年~2007年の生まれ。つい最近です。今の中2は、東日本大震災ですら、よくおぼえていないそうです。

考えてみると、今の中学生は22世紀まで生きている可能性があります。未来人ですね。

竹島 恭治

3月末から在宅です。

この4ヶ月で出社はわずか2日のみです。

竹田 佳代子

58会会員の皆様、お変わりないでしょうか。

コロナ禍で、コンサートなど、あらゆるイベントが中止となり感染予防のために、なるべく家に居ることを心がける生活も約5ヶ月になります。

私は7月からパートの仕事を再開し、週2、3日職場に行くことが、今は一番の楽しみです。

この状況を無事に乗り越えて、また58会のイベントに参加できる日を心待ちにしています。

行う方式で、習熟度が高いといわれている。私は知らないでそのような方式を採ったようだ。

オンライン授業1年を体験してそのメリットとデメリットを感じた。いつでもどこでも学べるのがオンライン授業のいいところだが、学生同士が対面で議論することができないので、授業としての一体感がない。画面上でも議論はできるか、対面ほど深まらないと感じる。グループワークでもオンラインでは連帯感が高まらない。今年4月以降、対面（面接）授業に切り替える大学が増えるだろうが、オンライン方式をすべて捨て去るのではなく、補習とか授業プラスでの使い方は十分機能として使える。「いつでも、どこでも」で言うと、遠隔地同士の学生を結びつけることも可能だ。オンラインの可能生を今後も追求して、対面授業でも生かしていきたいと思う。

“ 中央大学、新生に一律5万円給付 ”
総額約5億円の原資はOBの寄付

中央大学は3月1日、「コロナ禍に鑑みた2021年度学生支援策について」として、新生に一律5万円給付、並びに在学対象の「経済援助給付奨学金」を支給することを発表しました。総額は約5億円。この原資は、卒業生によって設立された「公益財団法人白門奨学会」と同窓会組織である「中央大学学会」からの寄付によるものです。

<https://www.chuo-u.ac.jp/news/2021/03/53407/>

多賀 一郎

私、阪神ファンでして、毎年、東京ドーム、ハマスタ等に足を運びますが、今年はそれもままならず、残念ではありますが、テレビ観戦を楽しんでおります。

関 孝雄

大阪の地より母校の発展を祈念しております。
世話役の皆様には、ウィルスに負けずお健やかに過ごされることをお祈りします。

寄稿

04 ここでやめても……
コロナ禍雑感

中川 順一

なかがわ・じゅんいち

文・文(国文)。ノラ・コミュニケーションズ(諏訪書房)社長。廣済堂産報出版を退職後、1992年に広告・出版の企画・編集会社を設立し現在に至る。元・駒沢女子大学非常勤講師(出版文化論)。中央大学評議員。



去年2月から憂鬱な日々が続き、TUBEも歌えない夏も過ぎた。人前で大声を出してはいけない。思わず1人カラオケで、昭和のスター・小林旭の『自動車ショー歌』を絶唱したいと思ったが、不謹慎だからやめた。

※ ※ ※

食事をして店を出た友人は、店にマスクを忘れてきた。入るときには検温とマスク着用チェックがあるが、出るときはノーチェックだから、マスクなしでしばらく街を歩いていた。これはズボンのファスナーを下ろしたまま歩いたも同然である。よくぞ逮捕されなかったと思いつつ、コンビニで買おうとしたがダメだ。マスクなしではコンビニに入店できない。さっきの店に戻ろうかと思ったがダメだ。マスクを着用していない人は入店できない。えらい時代になった。

アンケートご回答、多数の投稿
ありがとうございます。
投稿はまだ受付中です。▶▶▶▶



※ ※ ※

緊急事態宣言が出ているのに銀座のクラブをハシゴした議員が、世間から大いに叩かれた。議員は、飲みに行ったのではなく陳情を受けに行ったと説明した。

陳情とは国民が公的機関に問題の実情を陳述し要求する行為だと辞書に書いてある。だが銀座のお店では議員だけでなく、一般人も陳情を受ける。クラブのママやホステスさんの中には、いろいろと頼みごとをしてくる人がいる。ボトルを入れろとか、今度ゴルフに行こうとか、鮎を食べさせろとか。頼みごととは「陳情」である。なるほど、議員は陳情を受けに行ったのである。いつものように秘書に任せちゃ叩かれずに済んだのに。

※ ※ ※

部下を叱るときに気が弱いものだから「まあ、自分もそういうところがあるけど」とつい言ってしまう。部下は「なんだ、あんただってそうなんだろ」と思うから効果は半減する。相手が子供の場合は、なおさらである。叱るときに余計なことを言う必要はない。「人のモノを盗んではいけない」と泥棒が説教しても、言っていることは正しい。

5人以上の会食は自粛しようと政府が言っている最中に、総理大臣が8人で会食した。

※ ※ ※

コロナはただの風邪だと言い張る人がいる。ドナルド・トランプの祖父フレデリック・トランプ（フリードリヒ・トルンブ）は、スペイン風邪で死んだらしい。ウィキペディアにはそう書いてあるが、トランプ家では「じいさんはただの風邪で死んだ」ことになっているのだろうか。

※ ※ ※

「ちょっとトイレに行ってくるので荷物を見ていてください」と頼んだのに、戻ってきたら荷物がない。「荷物を見ていてくださいって頼んだでしょ」「見てましたよ。知らない男が持っていきました」……政府は「感染動向を緊張感を持って見守っている」と緊急事態宣言中に言い続けた。僕たちは、配られた小さなマスクと10万円の使い道を考えた。

※ ※ ※

出かけるか出かけないか。自分で決めるとするのは、案外大変だ。大変だけど、あてにならないと文句を言っている相手に「決めてください」というのも変だなと思っていたら、「自助」をモットーとする人が総理大臣になった。その人は「決めろ」と言われて決めるたびに批判されている。

久しぶりに外出したので、何が食べたいかと妻に聞くと、「なんでもいいから決めて」と言う。「じゃあ中華にしよう」と言う。「えーっ中華あ」と言う。何でもいいって言ったじゃないか。それでも妻は、女性政治家より優しく感じる。

※ ※ ※

感染予防か経済か、どっちなんだよと迫られると困ってしまう。一応、会社をやっているから経済は大事だ。でも、命も惜しい。死んで花実が咲くものか。いや、金が入らなきゃ死んだも同然。誰が感染してもおかしくない状況で、それでも食うためには外出しなければならない。

みんながそう言っていると都知事が言っても、うっかり信じてはいけない。自分のことは自分で決めるしかないのだ。

でも、自分で決められるのは、手洗い、消毒、3密回避……ぐらい。ワクチン接種の順番はまだ先だ。せいぜい睡眠をとって栄養をとって、ストレスを減らして免疫力アップ。

皆様も、どうかご自愛ください。

コロナが終わったら みんなで見に行こう

キャンパスは大きく変わった



コロナ禍で不要不急の外出の自粛が求められ、今年も多摩キャンパスでの花見はできません。大学への入構も厳しく制限されています。

ところで、私たちが卒業して38年、多摩キャンパスは大きく変わっています。2020年には、大学史に関するグラフィック展示コーナーなどもあるグローバル教育研究活動用施設「グローバル館」と、「国際教育寮」がモノレール駅のすぐ前に完成しています。

そしてコロナ禍の2021年2月にオープンしたのが、「FOREST GATEWAY CHUO」(学部共通棟。写真。大学ホームページより)。かつて、3号館の先にあったエネルギーセンター(煙突がある建物)の場所に建設されたこの建物は、学部横断の研究施設として利用されます。

多摩だけでなく、後樂園キャンパスも、2003年に高層棟・3号館が建てられ、2011年に2号館を新築されるなど、大きく変わっています。さらに「都心展開」ということで茗荷谷(文京区)で新キャンパス建設も進行中。

コロナ禍収束後は、みんなでキャンパスめぐりに出かけたいですね。

会員アンケート／コメントから

還暦・定年を 迎えて

2019年から2021年にかけては、同期の多くが「還暦」を迎えています。また「定年」となり新しい生活をスタートさせたり、その準備をしている同期も少なくありません。前号ではそんな仲間たちにアンケートをお願いしましたが、そこに寄せられた「近況」や「思い」を以下に挙げて掲載します。

私の近況と今想うこと う～やん(経・経)

学校卒業後、昭和60年7月まで大阪の会社に勤務。8月に父が創業の家業に戻り、33年が経ちました。社長就任して13年になります。

地元の和歌山白門会に所属して、新年会・総会・学術講演会を開催して交流をはかる他、近畿支部の皆さんとは“近畿ブロック”として協力して事業を行い、2018年は近畿ブロック125周年記念事業として大阪にて中大吹奏楽部の記念公演を行い、2019年は和歌山主催でバスで地元「高野山」へお越し頂き、精進料理を食べながら交流をはかりました。

また拳法部のOBとして毎年12月の全日本学生選手権(大阪府立)には、学生たちの応援と試合後は学生、OB、父母による懇親会を開催しています。

今、駿河台記念館も取り壊され、都内への移転の話がよく耳に入ります。私たちは多摩校舎2年目入学ですが、駿河台から多摩移転へ大きく力のかかった足跡を充分検証して、“都心回帰”への道筋に誤りがなきよう、これからの中大生に負担がのしかからないよう願うばかりです。

中央大学空手部卒。 白柴ミル(文・仏文)

介護はほぼ女性の仕事。もちろん無給で。役割分担という考え方は、まだ、なかった。大学生活で役に立ったことは学友会体育連盟空手部で過ごした時間。現在3つのカルチャーで4コマの空手の授業(?)を担当している。やみくもに汗を流して自己満足していた学生稽古とは違い、お年寄り、女性が怪我しないように注意しながら退屈しない内容を提供している(と思う)。30数年続いているのは、自分の面倒見のいい(?)明るい性格にあっているから、と思う。有段者数も30名ほどになった。また、体調不良で一度辞めた会員さんがまた空手を再開できる環境も自慢できるところだ。若い後継者を見届けるまで続けたい。

旅行の趣味は全くないので、子供、孫よりはるかにかわいい犬たちと穏やかに暮らすのが至福の時。健康さえ維持できれば、これからの人生、楽しくなると思う。

還暦の入院 ご隠居気分

およそ6週間の入院を経験し、昨日退院しました。足首を患っていたのですが、長期の治療期間を要することと骨切り術という治療法を受け入れることに、なかなか踏ん切りがつきませんでした。病状が悪化する中、今年の夏に信頼する専門医とのご縁があり、すべてを委ねて手術をしていただくことと意を決し今回の入院となりました。術後は自分の意志と力ではどうにもならないことがあることを思い知らされ、素直に身内や周りの方々のお世話になるという経験をしました。(感謝の言葉しかありません)。

一方で、還暦というこのタイミングで、仕事から距離を置けたこと・読みたかった本を思う存分読む時間を持てたこと・病室の窓からぼーっと空と雲の流れを眺められたことなどは、忙しかった自分には思わぬご褒美でした。(血圧も20程度下がりました。)この大きな節目で、自分の「生老病死」と向き合いつつも、これからの時間を力まずに(ちよっぴりご隠居気分)今を生きよう・楽しんでみようというような心持ちになった自分がいます。

今が最高! 内村 愛(文・史学科)

いつも“今が一番いい”と言える自分でありたい。歳を重ねてもいくつになっても、今、その時輝いていますように。

ありがとう中央大学 でんぐりセッチ(商・会計学科)

中央大学杉並高校から進学した時には、あまりにも、と言えるほど大学生活に大きな夢を抱いて入学式を迎えました。確かに楽しい毎日でしたが、サークル活動の人間関係や学部での勉強が本当に自分にあっているのか…現在、そして将来に不安を感じるようになり中央大学へ行くことがだんだん苦しくなり軽い鬱状態になり家族に心配されるようになりました。母親は、多摩センターの駅まで様子を見に来る日もありました。「このままではいけない」と心機一転、自分のでき

ることで他の方の役に立ちたいとボランティアサークルに入部しました。障害を持つ方や身寄りのない子どもさんとの出逢いで私の人生も大きく変わりました。一生涯付きあえる友達との出逢いや現在の伴侶にも出逢いました。私の進むべき道もかわりました。商学部会計学科にしながら福祉の勉強も始めて保育士の資格も取得しました。卒論では『財政再建』をテーマに書きました。ヒルトップでの友達やサークル仲間との食事でも楽しくて美味しかったのですが、図書館から見える景色も大好きでした。

勉強しながら多摩動物園の駅からおりてくる(中央大学にむかって)人の流れを見るのが大好きだった。二十分に一本の電車から、来るのは仲の良い友達だったり、憧れの先輩だったり来る人を見ながら、いろいろ妄想するのがとても楽しかった。中央大学で学んだこととか出逢いが私の人生の原点になっているなと思いました。六十歳、還暦を迎えるにあたり人生は一生涯学ぶことだなあと今しみじみと思っています。お子様、老人の方、障害を持った方すべての方々から、コツコツと勉強する生き方を知ったのも中央大学のおかげだと思っています。感謝しても感謝してもしきれない中央大学だと思います。中央大学のますますのご発展をお祈りしています。

還暦祝い旅 二楽ちゃん(経済・経済学科)

新型コロナウイルス騒ぎの中、半年前から企画していた中大フォークソング研究会の第15期仲間5名と熱海旅行を執行しました。2月28日(金)13時に熱海駅前“家康の湯”(足湯)に集合です。

現在の住まいはバラバラですが、京都や新潟からも参加しました(残念ながら単身赴任中で体調不良の1名のみ当日キャンセルし4名)。30数年ぶりの再会メンバーもいて、とてもなつかしく、楽しい旅の始まりです。昼食は海鮮寿司で乾杯し、寿命を延ばす為にパワースポット「来宮神社」へ参拝し、そのまま「リゾーピア熱海」へチェックイン、温泉を堪能しました。

今回は男2名女2名でしたが、近況報告や定年後のこと等たくさん話をして次回は全メンバー5名揃うことを楽しみに再会を誓い、帰途につきました。

学生時代と変わらないことをうれしく思い、旧友のありがたさを感じた旅でした。

二日酔いで翌朝書いたので乱筆、乱文すみません…

タイムリミットは11年? 宗澤 寛(法・政治)

50代半ばに私はある思いを強く持つようになった。“死ぬときに後悔はしたくない”。この思いを持つきっかけとなったのは、1,000人を超える末期患者を見届けた医者が患者から

聞いた後悔をまとめた著書を知ったことだった。そこには、「自分のやりたいことをやらなかった」、「行きたい場所に行かなかった」、「会いたい人に会わなかった」、「愛する人に『ありがとう』を伝えなかった」など、自分がしたくてもはやできないことを悔いる辛い言葉の数々があった。これらは私の心に深く刺さり、「死ぬ前にこんな後悔はしたくない」と強く思うようになった。

2018年の厚生労働省の統計では、日本の男性の健康寿命の平均は72.14歳(女性は74.79歳)。健康寿命の定義は、「健康上の問題で日常生活に制限がなく自立した生活を送れる期間」。つまり自分でやりたいことができる期間ということだ。この統計も私の意識に大きな影響を与えている。個人差はあろうがこの健康寿命を目安とするなら、今年4月に61歳となった私がやりたいことができる期間は残り11年ということになる(健康や経済面など生活の安定が前提ではあるが)。今までたくさんのことを我慢してきた。これからは自分のために自分のやりたいことをやりたいと強く思っている。

私は今、後悔しないように、還暦を迎えたときにロックオンした7つの目標の実現に向け自分の尻をたたいている。これらの目標はそれぞれ実現不可能ではないが相当な努力が必要で残り11年で果して全て実現できるか分からないが、達成したときの喜びを味わいたいと切に思う。肉親の介護や健康面などいろいろな事情でなかなか目標に向けて進めない58会のご同輩もおられると思うが、日々少しでも前に進むことができるよう祈りたい。私もいろいろな課題を抱えているが、ひるまず進もうと思う。

最後に私が弱い自分に言い聞かせている言葉を紹介してこの原稿を終りとしたい。

「君たちの時間は限られている。だから無駄に誰かの人生を生きないこと。最も大事なことは、あなたの心や直感に従う勇気を持つこと」(スティーブ・ジョブズ)

スターティング・オーバー!

オヤジライダーヒロオ(法・法)

記憶力の低下を痛感する毎日だが、たしか12年前の年男のとき、地元商工会議所発行の広報誌から原稿を依頼されて、孔子が天命を知ったのは数え年50でだったということなので、「天命を探る一年にしたい」と書いた覚えがある。

今度は泣いても笑っても還暦である。その後、自分は天命を知ったのか、その達成に向けて努力できているのか。…問われれば甚だ心許なく、逆に赤ん坊に還りつつあるような気がしないでもない。子どものとき信じていた、「年を取れば必ずと大人になる」というのが幻想に過ぎなかったことを悟っ

た今は、せめて「キレル老人」にならないよう自戒し、赤ちゃ
んではなく初心に還り、少年のようにピュアで軽やかな感覚
を持った経営者。…そういう者に私はなりたい。

(自分が還暦を迎える頃、Hondaから新型の原付二種
「CT125・ハンターカブ」が発売される。赤いチャンチャンコ
の代わりに、私は赤いカブで旅に出たい。)

富士山還暦プロレスを立ち上げる

川島(経・産経)

私、静岡県富士市に在住。

隣市の沼津市、富士宮市には地域おこしのプロレス団体
があるが、富士市にはない。

還暦野球やサッカーは大会があるが、還暦(60歳)以上
の人の集まりによるプロレス団体はないのではないかと。

中大OBである故ジャンボ鶴田さんの活躍が今でも目に焼
き付いている。IQ戦士と云われる桜庭氏も活躍していた。

還暦プロレスを立ち上げ、まだまだ若い者には負けんぞ!

60歳以上でもしっかりした肉体をお見せし、怪我のない
程度のファイトをお見せする。本格的なリングでの試合は無
理であろうが(経費的に)高齢者の講座や老人会の集まりな
どで、楽しく明るいプロレスを見てもらい、高齢者に今以上
に元気で明るい生活を送ってもらい若い世代にも刺激を与

えたい。

私は既にマスクマンレスラーをイメージし1枚マスク
(安物)を買った。ミルマスクラス、マスクド・スーパース
ターなどを狙いたい。

維持会費納入のお願い

白門58会は入会金・会費無料で運営していま
す。会の運営費は、会員の任意の維持費と会報
の広告、学員会本部からの支援金などによって賄っ
ています。維持費は会報発送費のほか、白門支
援金など学員会や大学への寄付に充てています。
ご協力お願いします。

今年度は白門飛躍募金等に寄付をしています。

維持会費は 1,000 円以上

協賛広告は 30,000 円以上

…いずれも、いくらでも結構です。

維持会費ご協力の方には、金額にかかわらず
学員会グッズを謹呈します。同封の振り込み用紙
をご利用ください。

振込先

ゆうちょ銀行(武蔵府中郵便局)
00180-5-433209
白門58会(ハクモンゴハチカイ)

編集 後記



何もかもが今までと変わってしまった2020年。帰宅時の手洗いうがいぐらいなら、それほ
どの煩わしさは感じないけれど、終始マスク着用、外から持ち込まれた物はアルコールで拭く、
顔に触らないようにする等は、正直、疲れます。声を出さない会食、観劇、観戦は、却ってスト
レスが溜りそうです。“新しい日常”と言いますが「これが日常になってしまったら堪らない!」と
いうのが本音です。が、当分、自粛生活が続きそうです。

58会会員各位のアンケート回答を読んでいると、皆さん“自粛生活”に努めているご様子。
何とか上手にストレスを発散しながら、元気で、コロナ禍が明けるのを待ちましょう。そして“今
までの日常”に戻ったらまたお会いしましょう。(会計・柳)

全国有名書店、Amazon等
インターネット書店で発売中



まんが・イラストでみる 江戸の暮らし 衣・食・住

「ポケット倶楽部」編集室
まんが・イラスト 桐丸ゆい

定価 1,000円(+税)

太平の世ともいわれた江戸時代、人々はどんな暮らしをして
いたのでしょうか? 江戸時代の住宅や衣服、食についての
コラムやまんが、イラストが満載。衣・食・住、そして暮ら
しそのものに焦点を当て、江戸時代をひも解いていきます。

株式会社ノラ・コミュニケーションズ

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-14-6 アライビル7F
TEL 03-3204-9401 FAX 03-3204-9402

諏訪書房

<https://noracom.co.jp/>